ぶらり道歩記

木之本町 北国街道 地蔵坂あたり

北国脇往還

新しい道標

北国街道

からって、川が流れていた。

明楽寺（みょうらくじ）

コンサートもおこなわれる

本陣 警高

ご先祖は伊吉[illegible]

白木屋（しょうや）

かめや

福津屋

敦賀屋

焼つるや

ユニークなパンがあるよ。ようそくと雑貨

辻定

七本館の富田酒造

三河屋

元・藤賀銀行 11/30まで「戦いの館」

清水洋服店

日吉屋

大阪館

地名のつく店名の中には、"大阪"館（理髪室）も…!!

☆→呉服屋さんが多いのは、たくさんの女工さんにお仕着せをつくったからとか…。

▨→醸造関係のお店も多い。

居川製菓舗

きのもと情報の館

谷製菓舗 地蔵せんべい

ささいカメラ

鶴の森 麦芽公園のイチョウ

神領通り

石下水路が復元されて、地蔵坂と命名された。

レンタサイクル

トイレ

有料P

観光案内所

伝統芸能保存活動センター

保健センター

スティックホール

木之本町役場

R8

まるや書店

田上山観音寺

境内の一隅にのこる古い道標

おおみわ 意富布良神社

元・はたご

元・麹屋

"売物件"の文字がつらい…。

浄信寺（じょうしんじ）

桑酒の山路酒店

元郡役所跡

"寺領"を示す石標。四隅にあったらしい。

坂の上は伊香高校

まちでひろった意匠（ガッタ・デ）

碧糸の丸ミハシモト

昭和20年代ごろまで、「牛馬市」が開かれていた。

現在、釣具店

かどや

伊香古の生の2通り道

トロン湯のおふろ 清泉園

つるかや

丸ニシガス

はとや

江北図書館

食堂 福田屋

きどニシ おじいちゃんの[illegible]

軍人食堂と呼ばれていたとか…。

JRきのもと

木之本駅

"木之本"の名の由来を象徴するような松の木。5年前の写真では二本とも青きとしている。

木之本の

一

木之本一の黒田武士

一つとせ――。♪日の本い～ちのォ黒田節ィ～の、黒田武士のご先祖さまは、木之本町黒田に住んでいた……。

官兵衛さんのことならこの人●

「官兵衛さんの話を聞きたい。誰がいいだろう」と木之本の人に聞くと、「そりゃ、藤田さんに限る」と教えられて訪ねたのが、木之本町役場である。藤田さんとは、ここの主、藤田市治町長のこと。

町長室の応接椅子にドッカと座って、あいさつもそこそこに、「官兵衛さんのことをお聞きしたくて伺いました。どうぞよろしく」といきなり切り出すと、「承知しました」と町長。噂にたがわず、淀みのない口調で、一大叙事詩を語るように「官兵衛物語」が始まった。

官兵衛とは、秀吉に、「ワシが死んだら天下を取る男」と言わしめた、黒田官兵衛如水のことである。彼が、無名の一武将から名をあげたのは、長篠の合戦（一五七五年）であった。当時、天下第一の精強な軍団を擁していた武田氏が、織田軍に惨敗するだろうとは、誰しも思わなかった。それを、播州小寺家の家臣であった官兵衛は、家中をまとめて織田氏に帰服。織田軍大勝利により、黒田官兵衛の芽が初めて世に出たわけだ。

木之本町黒田――。黒田家発祥の地である。集落の中心の公共広場は、古くから黒田屋敷跡と伝えられてきた所で、かつては農協や小学校の用地として利用されてきた。遊園地を造るためにブルドーザーを入れると、『黒田判官源宗満』と刻まれた石が出てきた。これこそ、黒田官兵衛、長政と、安土桃山時代を彩った武将の初代であった。以下、語り部を称する藤田町長の一席。

官兵衛は、黒田家九代目●

「黒田家の遠祖は、宇多天皇の孫、雅信です。これが源姓を名乗って、宇多源氏と呼ばれました。雅信の孫、源成頼のとき、近江国蒲生郡佐々木の庄に移り住み、佐々木源氏と称しました。別に、近江源氏とも呼ばれています。

近江源氏は、江南の六角氏、江北の京極氏と分かれ、京極氏の初代氏信の孫、源宗清、すなわち宗満が、伊香郡黒田村に住み、近在の領主として黒田判官と称したのが黒田氏の始まりです。官兵衛、つまり如水は、宗満から数えて九代目にあたります」

藤田町長が、これだけ黒田如水に入れ込むのも、郷土が生んだ英雄というだけでなく、町長自身、早稲田大学入学の折りの保証人が、黒田家十六代目の当主だったからでもある。

それはさておき、物語を聞こう。

「初代宗清（宗満）から六代高政までは、京極氏に仕えました。一五一一年、山城船岡山の戦いで軍令に背いて先陣を切ったかどで、足利十代将軍義種の怒りにふれて一命を危うくしましたが、京極氏の取りなしで、一命は取り留めたものの、黒田村にはいられなくなり、一族郎党を引き連れて、備前邑久郡福岡村（現長船町福岡）に移り住みました。

如水の先代、先々代の二代の間に、この地の名族にまでのし上がりました。福岡という名に愛着をもち、後に筑前の大大名となったとき、その地を福岡と呼び変えました。それが現在の福岡市です」

集落の中心にのこる屋敷跡●

町長さんへの取材を終えて、黒田の集落へ向かった。道順は十分知っているつもりだったのに、袋小路に迷い込んでしまった。西黒田という集落だった。カンカン照りのなか、人っこひとりいない。ウロウロしていると、シュミーズ姿のおばあさんが木陰で涼をとっていた。

「すんません、官兵衛さんの屋敷跡はどこですか」

と問うと、お歳の割には張りのある豊満な胸のおばあさんは、小首を傾げた。私の声が聞こえたのか、隣家の開け放たれた窓から、もう一人のおばあさんが顔を出して、

「この道、まっすぐ行ってんなぁ、集会所があるとかいんなぁ、ほこらで聞いたらわかるわなぁ」

と、先ほどのおばあさんに同意を求めるように言ったが、おばあさんはやっぱりまだ木陰に座って小首を傾げたままだった。

▼黒田の集落にのこる宗満の墓

『黒田家御廟』はすぐわかった。町長さんの言葉どおり、集落のほぼ中心にそこそこの広場があって、集会所が建っている。入り口に何人かの人がいた。全ての視線が私を追いかけているのを感じた。分かってはいたけれど、他所者のせめてもの礼儀と、尋ねることにした。

「黒田家の屋敷跡はここですか？」

と、農機具メーカーの名の入った帽子をかぶった初老の人に聞くと、わざわざ御廟前まで案内してくれた。

東北の角に碑があり、石造りの祠には広場の改修工事の際に出てきた墓石が納められている。墓石には、黒田家初代とされる宗満の名が微かに読める。御廟を守るようにして佇む木々から、まるでトタン屋根を叩きつける雨のような蟬の声が聞こえてきて、「夏」を一層暑くさせた。

御廟を記録にとどめようとカメラを向けたが、フィルムを入れ忘れていた。木之本まで買いに戻ればいいものを、この日の暑さはその気力さえ萎えさせた。

所用があって、再びここを訪れたのは十日後だった。その日は、風が涼気を含み、微かに秋をさえ感じさせた。先頃亡くなった司馬遼太郎氏も、明治維新で侯爵に列せられた黒田家の人々も、何度となくここを訪れている。

発祥の地をまちづくりに●

藤田町長に、「黒田家発祥の地」を核に、新たなまちづくりを考えては？　と提案したが、ここが黒田の名を天下に知らしめた官兵衛生誕の地なら違ったものになっただろうが、もう一つインパクトがない。むしろ姫路や福岡の方がクローズアップされるのは仕方がないといったところ。

余談だが、長浜は、千利休、古田織部と並び称され、建築、造園、茶の分野で優れた才能を開花させた小堀遠州生誕の地であるのに、秀吉、三成ほど注目されてこなかったのは何故か。「綺麗さび」という独自の境地を切り開き、今日再評価の声が高まっているのに……。

話を戻そう。黒田家は、湖北の木之本で発祥し、戦国時代を生き抜くために流転を重ね、官兵衛の功績によって子孫はその地位を確かにし、明治維新まで続いた。維新政府から、大名華族として、公・侯・伯・子・男の爵位のなかでも数少ない侯爵に列せられたのだった。その後の黒田家をめぐる数々の挿話には、歴史に翻弄されていく悲喜こもごもの物語があるが、紙数がつきたので、このあたりで幕としよう。（姉川　渉）